17　　松の葉に降る雪　　読解のつぼ③　複数の和歌が含まれる文章での練習

天皇の女御、のに、「中納言の君」という女性がお仕えしていた。

の宮、にて、一の宮と聞こえて、色好みたまひける頃、承香殿はいと近きほどになむありける。①らうあり、をかしき人々ありと、聞きたまうて、物などのたまひかはしけり。さりける頃ほひ、この中納言の君に、忍びて寝たまひそめてけり。時々おはしまして後、この宮、②をさをさ問ひたまはざりける頃、女のもとより詠みてたてまつりける。

Ａ　人をとくあくた川てふののなにはたがはぬ君にぞありける

かくて物も食はで、泣く泣く病になりて恋ひたてまつりける。かの承香殿の前の松に雪の降りかかりけるを折りて、かくなむ聞こえたてまつりける。

Ｂ　ぬ人をまつの葉にふる白雪の消えこそかへれあはぬ思ひに

とてなむ、「③ゆめこの雪おとすな」と、使ひに言ひてなむたてまつりける。

* 語注

故兵部卿の宮＝親王。　　一の宮＝一番目に生まれた皇子。

津の国＝の国（今の大阪市内）。「津の国の」は難波（今の大阪市）の枕詞となっている。

消えこそかへれ＝ここでの「かへる」は、「消ゆ」の意味を強める語。

【原文】

故兵部卿の宮、若男にて、一の宮と聞こえて、色好みたまひける頃、承香殿はいと近きほどになむありける。らうあり、をかしき人々ありと、聞きたまうて、物などのたまひかはしけり。さりける頃ほひ、この中納言の君に、忍びて寝たまひそめてけり。時々おはしまして後、この宮、をさをさ問ひたまはざりける頃、女のもとより詠みてたてまつりける。

　人をとくあくた川てふ津の国のなにはたがはぬ君にぞありける

かくて物も食はで、泣く泣く病になりて恋ひたてまつりける。かの承香殿の前の松に雪の降りかかりけるを折りて、かくなむ聞こえたてまつりける。

　来ぬ人をまつの葉にふる白雪の消えこそかへれあはぬ思ひに

とてなむ、「ゆめこの雪おとすな」と、使ひに言ひてなむたてまつりける。

問一　傍線部①・②の解釈として最も適当なものを選べ。〈10点×2〉

ア　一風変わっているが、すばらしい人たち

①　　 イ　人生経験が豊富で、高貴な人たち

ウ　苦労を重ねた、尊敬に値する人たち

エ　物事に精通して、情趣を解する人たち

ア　めったに女の所を訪ねなさらなかった折

②　　 イ　あえて女の気持ちをお尋ねにならなかった間

ウ　次第に女の所を訪問なさらなくなった頃

エ　全く女の気持ちをお聞きにならなかった時

①〔　　　〕　②〔　　　〕

問二　Ａの和歌に関する説明として最も適当なものを選べ。 〈15点〉

ア　摂津の国を流れるを題材にして、成就することのない故兵部卿の宮への思いを川に流すように消し去ってしまいたいという、中納言の君の切ない気持ちが詠まれている。

イ　「芥川」に「あくた」という「」の意味を重ねて、すぐに飽きて人を見捨ててしまうのはどおりだったと、故兵部卿の宮を恨む中納言の君の気持ちが詠まれている。

ウ　「なには」は「難波」を指し、また「何は」の意味が重ねられて、名高い故兵部卿の宮に何としても早く会いたいという、中納言の君の気持ちが詠まれている。

エ　「なには」には「難波」と「名には」の意味が重ねられているが、身分的につり合わないため故兵部卿の宮との恋を諦めようとする、中納言の君の気持ちが詠まれている。

〔　　　〕

問三　傍線部③の説明として最も適当なものを選べ。〈15点〉

ア　会えないつらさゆえに、この身が雪のように消えてなくなってしまいそうだという恨み言を詠んだＢの歌を届けさせる際に、中納言の君が、故兵部卿の宮へ送る使いに対して「決してこの雪を落とさないように」と念を押している。

イ　会えないつらさに苦しみ続けるくらいなら、雪のように思いが消えてしまえばいいのにと詠んだＢの歌を届けさせる際に、中納言の君が、故兵部卿の宮へ送る使いに対して「どうかこの雪を落とさないでほしい」と頼んでいる。

ウ　健気に自分を待ち続ける相手に、会いに行けず申し訳なく思う気持ちを詠んだＢの歌を届けさせる際に、故兵部卿の宮が、返歌を求める中納言の君の使いに対して「何としてもこの雪を落とさないように」とをさしている。

エ　中納言の君を思う気持ちが薄らいできたことを、はかなく消える雪にえて詠んだＢの歌を届けさせる際に、故兵部卿の宮が、返歌を求める中納言の君の使いに対して「絶対にこの雪を落とすな」と命じている。

〔　　　〕

【解答】

問一　①＝エ　②＝ア〈10点×2〉

問二　イ〈15点〉

問三　ア〈15点〉

【現代語訳】

故兵部卿の宮が、まだ若い男であって、一の宮と申し上げて、恋愛を好んでいらっしゃった頃、承香殿はたいそう近いところにあった。（そこに、）物事に精通して、情趣を解する人たちがいると、お聞きになって、気の利いたお話などを語り合いなさった。そうした頃、この中納言の君と、人目を避けて共寝をなさるようになった。時々おいでになって後、この宮が、ほとんど（女の所を）訪ねなさらなかった折、女のもとから（故兵部卿の宮に）詠んで差し上げた（歌）。

Ａ　（あなたは）人のことをすぐに飽きて、芥〔＝ごみ〕のようにお見捨てになるという噂ですが、その噂どおりの方でありましたことよ。

こうして物も食べないで、涙にくれて病気にな（るほどにな）って恋い慕い申し上げた。（中納言の君は）あの承香殿の前の松に雪が降りかかっ（てい）たのを折って、このように（歌を）お詠み申し上げた。

Ｂ　いつになっても来てくださらないあなたを待ちながら過ごしておりますので、松の葉に降り積もる白雪が消えるように、私も消えてなくなりそうに思われます。会わない切なさのために。

と書いて、「決してこの雪を落とさないように」と、使いの者に言って差し上げた。

【補充問題】

問１　和歌Ａで用いられている枕詞を抜き出して答えよ。

問２　和歌Ｂを現代語訳せよ。

【補充問題解答】

問１　津の国の

問２　いつになっても来て下さらないあなたを待ちながら過ごしておりますので、松の葉に降り積もる白雪が消えるように、私も消えてなくなりそうに思われます。会わない切なさのために。